

小児科医として最近思うこと

岡 田 真 人

私のような小児科医が、このような専門誌に学問的な価値のあることを述べられるわけもないので、診療の合い間に子供たちについて思ったことを述べさせていただきます。

一 最近の障害児の早期発見、早期治療という動きについて

大津市を中心として、急速に日本中に広まっている運動として障害児の早期発見、早期治療体制の確立があります。私自身もそれに興味をもった一人であり、かなり検討もいたしました。最近のあるグループの研究によりますとポイタ診断法でひっかかってくるうちの大部分を占める軽症者は、何もしないで経過を観察してみると全く正常発育を示すという

ことと、重症者に対してはリハビリによって軽快する傾向がほとんどみられないということである。したがってポイタ診断法のみをみて、CP児の可能性があると両親につげることは、無用な心配を与えるだけであまり意味がないのではと思ひ、また重症な障害者にあたかもそれが治るような幻想を与えることもまた問題ある考え方ではないかと思ひます。リハビリテーションではなく残された機能をいかに上手に発達させていくかのハビリテーションの問題であり、決して失なつた機能を回復させるものではないように考えます。

私が新生児の重症仮死児（難産による障害児）の頭部CT傷の研究を行なつた時に、そのような子供達は脳の片方のみの障害でなく、両方の脳の障害を受けていました。交通事故による脳障害や、脳卒中などの障害などは片側であることが多く、残つた健康な側の脳へ機能を移すことによってリハビリテーションが可能になつてくることが多く、両側共障害

を受けている場合は、残された機能をいかに発達させるかにかかつており、おのずからやはりその障害の程度によって限界があることを認識する必要があると考へております。

ただ残された機能を最大限に発達させるためにはリハビリテーションは必要であり、その体制の確立は必要であると考えます。しかしその対象となる患者は、放置していても自然によくなる軽症群は慎重にみているだけでよく、親に無用な心配を与えない配慮が必要でかつあまりに重度の障害児の場合親に期待を与えすぎないことが必要であると考えます。

私達の小児科医はそのような障害児を少しでも少なくするために、その障害児の原因の大部分を占める未熟児、黄疸、仮死児に積極的に取り組み、五つ子でみられるように未熟児医療の進歩、黄疸に対する光線療法の開始、新生児頭蓋内出血に対する早期脳外科手術の進歩等により、根本より障害児を少なくする医療体制を作つてきました。日本では昭和五

○年頃よりそのような体制が徐々に出現し、最近の学会への報告では、その一番の目的である、障害児発生数の減少がみられはじめているという、大変うれしい報告がなされています。

残念なことにまだまだ医学の力は微力であり、完全にそれら障害児の発生を防いだり、治療したりすることは出来ないで、そのような障害児が社会の中で溶け込んで生きていけるように皆様と力を合せていきたいと思えます。

二 登校拒否児について

私の病院には、静岡県の協力で院内養護学級が設置されています。病弱児を対象としたものですが、登校拒否的な子供達も入院して通学しております。この一年間に5名のそのような子供達が入院いたしました。その子供達との関りの中で、私達スタッフが感じたことは、彼らに内的に多少問題は認められ

るが、それは多少なりとも人間が持っている問題であり、その周囲の大部分は親と親子を取りまく社会的環境にあることです。

複雑な両親の関係とそれに振り回される子供の心が登校拒否的な心身症として表われているのであり、私達医療人や、教育スタッフ、ケースワーカー、児童相談所の職員等皆がチームのようになって問題解決の方向に進んでも、社会の大きな壁にぶつかって止まるしかなく、子供達の生活環境としては問題の多い病院の中で子供達は生活せざるを得なかった。閉鎖社会でなく、いろんな子供達と交わりながら大きくなっていくべき子供達が、特殊な環境である病院の中で育っていく姿を見ると、現代社会の持っている心の欠如と、また一般の小中学校が取っている教育態度に憤りを感じ、子供達の将来を思うと暗い気持ちにさせられました。ところが養護学校の先生の献心的な努力により、子供達を信じ、愛情をもって接触していく重要性をよ

り一層認識させられました。治療するのではなく、心を通い合わせる事が最も大事であると思います。

三 チームを組むために

私達医師は、なかなか難しい人達の集まりであり、皆様方からは敬遠されている集団ではないかと思えます。しかし障害児の問題や登校拒否児の問題など、社会的問題と医療的問題が関連してくると、協力してその問題解決に当らなければならぬ時がきているような気がしております。医師集団は決して特殊な物わからず屋でなく、やや自己主張の強い集団にすぎず、お互いに協力して、地域問題として子供達の発育に関わっていく必要性が最近が増してきているのではないかと思います。いろんなアプローチがそれぞれなされているようですが、一つのテーマについて意見を交換することによって次のよ

りよいステップに進むことが出来るのではないかと考えております。

とりとめもない事を述べましたが、少しでも皆様のお役に立てばと考えました。

(聖隷三ヶ原病院小児科)

